

日本語の「て形」についての研究ノート 1: 「て形」は「現在分詞」と言えるのか

高野 寿子

0. はじめに

実際に統計を取って見たことはありませんが、日本語動詞の活用形の中で最も多用されるのは、或いはその可能性があるのは、「て形」であろうと思います。日本語初級文法に出てくる構文のうち、「て形」を使ったものが圧倒的に多いのも驚くには及びません。「てください」「ている」「てある」「てはいけない」「てもいい」「てしまう」「てみる」「ておく」「てあげる・てもらう・てくれる」「てほしい」「てくる・ていく」「てから……」, それに、「て形」は、接続形として、「昨日獣医さんに行って、ヒューに予防注射をしてもらった。」とか、「ヒューは、お正月御節を食べ過ぎて、お腹をこわした。」のように使われます。このように広範囲に渡って使われる「て形」について、“So, what is this TE-form?” などという質問をする学生は、幸運にもあまりいません。しかし、3年に一人ぐらいの割合で、このような無邪気な質問をする学生がいます。そういう学生を一時的にも納得させる為に私が用意している答えは、“It’s like the present participle.” という、何とも歯切れの悪いものです。勿論、こう答えた後には、それ以上突っ込んだ質問が出ないことをただただ願うのです。私は決して権威主義者ではありませんが、“I don’t know.” とはあまり言いたくないのです。長い間私はこの歯切れの悪い答えをもう少し歯切れの良いものにしたいと思ってきましたが、主に私の怠慢と能力のなさが故に、そうする努力を怠ってきました。今回言語センター広報に場所を頂いたのを機会に、一念発起して、「て形」の文法的機能と性質について検証する努力を始めたいと思います。以下はその最初の試みです。

この研究ノートでは、まず方法論の妥当性と先行研究に簡単に言及した後、日本語の「て形」が「現在分詞」と言えるかどうかを考察します。その為に主に二つのことをします。第一は、日本語の「て形」と英語の「現在分詞」が共有すると思われる様々な用法を比較観察し、二つの活用形が共有する文法的機能と性質を検証します。第二は、「て形」と「現在分詞」がその振る舞いを全く異にする点、つまり、「現在分詞」が形容詞的機能を有し、「て形」がそのような形容詞的機能に欠けるという点を議論し、これが「て形」と「現在分詞」の本性に由来するものであるかどうかを検証します。

1. 方法論

以下では、日本語の動詞の一活用形の文法的機能と性質を、英語という他の言語の既存の活用カテゴリーのそれと比較することで、明らかにしようとしています。動詞活用のオントロジーが全ての言語で同じである訳はありませんから、ある言語のある活用形が、他の言語のある活用形に相応していることは、あるともないとも言えません。言えることは、それぞれの言語が表現する意味の概念は、ある程度ユニバーサルであろうということです。テンス(時制)、アスペクト(相)、ヴォイス(態)、ムード(法)といったものを表現する抽象的概念は全ての言語に共通して見られるものですが、そのような概念を手持ちの札でどのように表現するかというストラテジーは言語によって異なります。例えば、日本語では、受身は、動詞を活用させて受身形を作りますが、英

語では、助動詞としての“be”動詞と過去分詞という活用形を組み合わせて作ります。動詞の活用形の種類を調べるということは、言わばその言語の持ち札を調べることです。ストラテジーが違えば、持ち札も違うであろうことが予想されますし、また、持ち札が違うから違うストラテジーを取るとも考えられます。以上のように考えると、そもそも日本語の一活用形と英語の一活用形を同じものだとか、違うものだと言うこと自体あまり意味のないことのように思われます。意味があるのは、それぞれの言語が持つ持ち札にユニバーサルな形態があるかどうか、あるとすれば、それは何なのかを知ることです。それを知る為にはまず異なる言語の同じような機能を果たすと思われる活用形を比較することから始めなければなりません。日本語の「て形」の文法的機能と性質を他の言語の（この場合は英語の）ある活用形に照らし合わせて見出そうとするのは、日本語の特殊性を無視して安易に西洋文法を導入するというものでは決してありません。そうすることが「て形」の特殊性と普遍性をよりよく理解する為の唯一有効な方法だと考えるからに他なりません。

2. 先行研究

ここでは、日本語の文法書の中で、「て形」がどのように分類されてきているかを見ます。アメリカで多くの日本語学者に影響した Bernard Bloch は、“Studies in Colloquial Japanese II: Syntax” (1946) で「て形」を“Gerund”，連用形 (Pre-Masu Form) を，“Infinitive”，「たり形」を“Alternative”と呼び、それら三つ一括して“Participial”であるとしました。以来、Samuel Martin, Andrew Miller, Eleanor Jordan といったアメリカの日本語学者の多くは、「て形」を“Gerund”と呼びます。日本語を生成文法の立場から論ずる久野も、“The Structure of the Japanese Language” (1973) で、「て形」を“-Te Gerundive Form”連用形 (Pre-Masu Form) を“-I Continuative Form”としていますし、新しくは“An Introduction to Japanese Linguistics” (Tujimura 1996)でも“Gerundive form”という用語が使われています。

しかし、“Gerund”をあくまで動名詞であると解釈すると、「て形」を動名詞とすることには些か抵抗があります。「て形」は、原則として名詞としては機能しないとされているからです。こういった抵抗感を反映してか、今日使われている日本語の教科書の殆どが、「て形」を、単に“TE-form”と呼び、ある特定の既存の活用形と結びつけることをしないのが普通です。“A study of Japanese Clause Linkage: The Connective TE in Japanese” (Hasegawa 1996)で、筆者も、

In this book, accordingly, I adhere to the traditional and noncommittal analysis of TE as simply a connective suffix. ...This syntactic property of iterability is another reason why TE must be conceptualized as a connective suffix rather than as a particle that creates gerunds or participles. (Hasegawa, 1996 p.3)

と述べています。ここで長谷川は、「て形」が動詞の一活用形という認識から離れて、「て」が「の」「から」「なら」「ば」「と」などと並ぶ“connective suffix”であるとしています。これは、所謂学校文法が例えば「書いた」を語幹「書」、活用語尾「い」（連用形）、助動詞「た」に分けて分析するのに近いものに思われます。

興味深い指摘は、「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト」（寺村秀夫，1969）に見られます。ここでは「連用形」（Pre-Masu Form）が「現在分詞」，「て形」が「過去分詞」とされます。

寺村は、そうする理由として「それだけでは陳述（叙述）を完成せず、他の語、他の文と結びついて行く可能性をもっていることを本性とするものである。」(p.39)からと言っています。「て形」の本性について寺村は12年後もその考えを変えていないようですが、「て形」の呼び名そのものに関しては思い直した節があります。1981年の『日本語の文法』では、「特定のムードは未だ実現せず、次に文を続けたり、いろいろな補助形式と結びついては派生形を作る」(p.73)とし、「連用形」と「て形」を合わせて「接続形」と呼んでいます。

「て形」は、時制を伴わない活用形が故、文構造を完結することができないということで、「終止形」と区別され、名詞の直前に位置してそれを修飾する機能がないことから、「連用形」をされます。(『日本文法教室』芳賀, 1962)「命令形」「仮定形」などがそれだけで、特定のムードを表現するのに対し、寺村が指摘するように、「て形」は、ムードが発生する以前の形であると言えますが、統語的には、時制を伴う主動詞に接続し、動作や状態が連続して、或いは同時に生起することを意味します。このような意味的統語的機能が存在動詞と結びついて進行、完了などのアスペクトを表現すると考えられます。「て形」の性質が概ねこのようなものであるとすると、「て形」を「分詞」とした Bloch の総括的の分類や、寺村のそれが妥当であるように思われますが、「て形」を「分詞」だとする文法家は、以外に少ない上、これを殊更「現在分詞」と呼ぶのは、私の知る限りでは、“*An Historical Grammar of Japanese*” (1928)を著した Sir George Sansom だけです。

Sansom は、「て」は“Affirmative Verbal Suffix *tsu*”の“conjunctive form”だとし、5つの用法¹を説明しています。その最初の2つに挙がっているのが、動詞と形容詞に付いて分詞形を作るというものです。

- (1) Suffixed to verbs, it can form a participle, as in *yukite* = going, having gone.
- (2) Suffixed to adjectives in their adverbial forms it enables the adjectives to be used in a participial construction, as in
omoshirokute = being amusing
warukutemo takashi = though bad, it is dear (Sansom 1928, p.177)

この説明に到る本文の中で、Sansom は

“Here we have a form which serves a purpose analogous to that of a participle in English, but it is not exclusively either a past or a present participle.” (Sansom 1928, p. 176)

と言い、“going”を“present participle”、“having gone”を“past participle”であるとしているようですが、言うまでもなく、「過去分詞」と呼ばれる活用形は、Jespersen が第二の分詞形と呼んだもので、ここでは“gone”がそれに当たります。“having gone”は完了相或いは完了時制を伴う現在分詞形ですので、ここで Sansom が意図したことは、現在分詞形には、完了相を含むものと、そうでないものがあるということになります。これは、“conjunctive form”が本来有する性質から生じる現象であると思われませんが、この点については、後で詳しく述べることにします。

Sansom の説明はかなり説得力があるように思います。それでは何故「て形」が「分詞」である

という説が定着しなかったのかと私は考えます。定着しなかった理由の一つとして思い当たるのは、「分詞」の形容詞的働きです。「分詞」が形容詞の機能を果たすのに対して、「て形」には形容詞的な、つまり、名詞を修飾する用法はありません。昔「飛んでイスタンブール」という歌がありました。ここで「飛んで」はイスタンブールの属性を何ら意味しません。一方、“Flying Istanbul”は、“flying”が現在分詞であれば、「イスタンブールが飛ぶ」という解釈しかありません。「分詞」が形容詞であることを考慮に入れると、確かに「て形」は「分詞」とは言いがたいのです。寺村は、「て形」がその用法において英語の“gerund”とはかなり食い違っていると指摘した後で、「分詞と呼んだ所で同じ危険性はあるわけだが、少しはマシなように思う。」(寺村, 1969, p.39)と述べています。ここで言う危険性は、違うものを同じだと言ってしまう危険性ですが、同じものを違うものだと言ってしまう危険性もあります。用法に食い違いがあるというだけで、「て形」が「分詞」ではないと判断するのは、早急であると思います。その食い違いが、「分詞」というものの本性に由来するものであるかどうかを見極める必要があります。つまり、「分詞」にAという用法があり、「て形」にそれがないというだけでは、「て形」が「分詞」でないと判断する十分な条件にはなりません。「て形」が「分詞」の本性を持っていないからAがないと言わなければなりません。

3. 日本語の「て形」と英語の「現在分詞」

日本語の「て形」は、上で述べたように、時制を伴う主動詞に接続し、動作や状態が連続して、或いは同時に生起することを意味する活用形で、英語の「現在分詞」²は、動作や行為の継続・反復を意味し、“durative participle”或いは“iterative participle”と呼ばれます。この二つの活用形には、共通するところが多いと私は思います。例えば両方とも存在動詞と結びついて進行形(継続相)を表現します。

- (1) a. ヒューは、長椅で寝ている。
b. Hue is sleeping on the couch.

分詞節の中で、“predicate appositive” (Curme, 1931), 或いは, Jespersen が “participles in apposition” (1933) とする用法も、「て形」の用法の一つと思われそうですし、

- (2) a. ヒューは、尻尾を振って私を出迎える。
b. Hue welcomes me wagging his tail.

所謂分詞構文と呼ばれるものも、「て形」で言い換えることができます。

- (3) a. 散歩から帰って、私は、ヒューが首輪をしていないのに気付いた。
b. Coming back from the walk, I found Hue not wearing his collar.
- (4) a. メス犬を見て、ヒューは追いかけて行った。
b. Seeing a bitch, Hue took off running after her.

- (5) a. 公園でポピーに会って、ヒューはとても喜んだ。
b. Coming across with Poppy in the park, Hue was very pleased.
- (6) a. 今日は土曜日で、ヒューは学校がある。
b. Today being Saturday, Hue has school.
- (7) a. 正直に言って、クーは太りすぎだ。
b. Honestly speaking, Koo is overweight.

例外は、次のような条件を示す独立分詞の場合です。

- (8) a. *事情が許して、ヒューを連れて行きます。
b. 事情が許せば、ヒューを連れて行きます。
c. I will take Hue along, circumstances permitting.

(1)と(2)では、時制を伴う動詞1と「て形」の動詞2が示す動作が同時に生起しているという点で共通していますが、(1)の動詞1の存在動詞が辞書的内容に希薄であるので、ここで生起している動作は一つだけのように思われるのに対し、(2)では、二つの動作が同時に生起していて、Jespersenの用語の言う通り、意味的には同格です。「て形」は、また、「行く」「来る」などの直示的要素を含む運動動詞に付いて付帯状況も表します。

- (9) a. ヒューが麦畑を突っ切って走って来る。
b. Hue comes running straight through the barley field.
c. ヒューはすぐ若い女性に付いて行く。
d. Hue readily goes following a young woman.

(1), (2), (9)にある分詞形が、意味的には主語を叙述し、統語的には主動詞の補語としVPに支配されているか、或いは主語にコントロールされるPROを伴う副詞節としてVPに付加されているのかというような統語論的分析はここでは試みませんが、英語の現在分詞が形容詞化し、日本語の「て形」が副詞化することを考えると、前者は英語に、後者が日本語の構造に近いようにも思われます。何れにせよ、動詞1のR時(Reference time)³と、継続や反復を意味する現在分詞の形を取る動詞2のR時が一致します。その為に、“progressive”や“appositive”という解釈が生じると思われます⁴。

久野は、「て形」は、完了時制を表す助動詞「たり」に由来し、V1-te V2というパターンは、“V1 and then”或いは“having V1-ed”という暗示的意味があると言い、二つの動作や状態が同時に生起するような場合にはこの文構造は使えないとしています。次のような例文は、英語で言うような意味では文法的に正しくないというのが彼の判断ですが、これは、私の直感的判断とは少し異なります。

*ジョンは、メアリーを憎んで、ジェーンを愛している。(4b in Kuno 1973, p.195)

“John hates Mary and loves Jane.”

*ジョンは、よく遊んで、よく勉強する。(3b in Kuno 1973, p.195)

“John plays a lot and studies a lot.”

このままでも良いような気もしますが、これらを「ジョンは、メアリーを憎んでいて、ジェーンを愛している。」「ジョンは、よく遊んで、よく勉強もする。」とすると、もっと自然になり、意味的にも文法性は保たれると判断します。「て形」は久野が考えているより適用範囲が広いというのが私の結論です。前述の(1), (2), (9)の例文で示される「て形」には久野の主張する暗示的意味はありませんし、そもそも次の例文に見られるような状態動詞の「て形」には彼の主張は論理的に当てはまりません。

- (10) a. ヒューの尻尾は、太くて短い。
b. Hue's tail is thick and short.

“Conjunctive form”（「継続形」）としての「て形」は、等位接続詞“and”の次の3つの用法の全てで対応します。

- (11) a. ババは、食事の支度をして、同時に家を掃除する。
b. Baba cooks a meal and cleans the house simultaneously.
c. ババは、食事の支度をして、その後で家の掃除をする。
d. Baba cooks a meal and cleans the house in that order.
e. ババは、必ずしもその順番ではないが、食事の支度をして、家を掃除する。
f. Baba cooks a meal and cleans the house not necessarily in that order.

久野の指摘は、「接続形」の用法のうち、(11)dで見られるものに当てはまります。上に挙げた例文(3)から(5)の「て形」がそれで、時制を伴う主動詞1のR時より、「て形」の動詞2のそれが、先行する場合で、二つの動作が順番に起こります。

英語の文詞構文は、時、原因・理由、条件、譲歩、付帯状況などを表す副詞節を作るものをされ、何らかの接続詞が省略されているとして、適当な接続詞を補って解釈すると学校文法では習います。例えば(3)bは時を表す分詞構文で、(3)c 或いは(3)c'のように書き換えが可能だとされますが、二つの動作のR時が実際にどの位離れているのかについては明確には示されません。このように意味が漠然として、明確ではないのが分詞構文のもう一つの特徴でもあります。

- (3) a. 散歩から帰って、私は、ヒューが首輪をしていないのに気付いた。
b. Coming back from the walk, I found Hue not wearing his collar.
c. When I came back home from the walk, (immediately) I found Hue not wearing his collar.
c'. After I came back home from the walk, (later) I found Hue not wearing his collar.

(3)aでも全く同じことが言えます。「帰ってすぐ気付いた」のか、「帰ってしばらくして気付いた」のかが今一つ漠然としています。(4)aでは、しかし、「見てすぐ追いかけた」であろうと想像できますが、それは、私の文法に関する知識を基にそう解釈するのではなく、去勢していない4歳の雄犬が雌犬を見てどのように反応するかを私がたまたま承知しているからです。例文(5)の分詞構文は、理由・原因を示すそれと思われまますから、(3)bを何か接続詞を補って書き換えると、(5)cとなります。

- (5) a. 公園でポピーに会って、ヒューはとても喜んだ。
- b. Coming across with Poppy in the park, Hue was very pleased.
- c. Hue was very pleased because he came across with Poppy in the park.

(5)aは、しかし、「公園でポピーに会ったから、ヒューが喜んだ」ほどには、「会ったこと」と「喜んだこと」の因果関係は明確ではありません。実際、(5)aの後で次のようにも言えるのです。

- (5) a'. と言うのも、ポピーのパパがいつもクッキーをくれるからだ。

(5)bの後でも、同じことが言えます。

- (5) b'. That's because Poppy's dad always gives him some cookies.

これはしかし、(5)cの後には続きません。という事は、(5)bの解釈としては、(5)cは適当ではなく、次のような曖昧な表現が、より正確な解釈であろうということになります。

- (5) c'. Hue came across with Poppy in the park, and he was very pleased.

例文(6), (7)のような場合には、内在するとされる適当な接続詞は“and”以外には考えられません。

- (6) a. 今日は土曜日で、ヒューは学校がある。
- b. Today being Saturday, Hue has school.
- c. Today is Saturday, and (so) Hue has school.

- (7) a. 正直に言って、クーは太りすぎだ。
- b. Honestly speaking, Koo is overweight.
- c. I will speak honestly, and say that Koo is overweight.

このように見てくると、ここで「現在分詞」や「て形」によって導かれる節は、副詞節 (Subordinate clause) というよりは、むしろ等位節 (coordinate clause) であることが理解されます⁵。

以上を纏めると、日本語の「て形」も英語の「現在分詞」も、時制を伴わない動詞の活用形で、次の三つの用法を共有しているということが言えます。

1. 存在動詞の補語となって進行相を表す
2. 動詞句の中で、時制を伴う主動詞と共起して、随行する動作或いは付帯する状況を表す
3. ある節に先行して、それに続く等位節 (coordinate clause) を導く

この三つの用法に共通する文法的機能が“conjunctive”といことになります。二つの名詞ではなく、動詞を接続する、つまり、二つの動作や状態を接続するのですから、これらの動作や状態に内蔵されているR時も接続することになります。二つのR時がどのような関係で接続されるかによって、自ずと、動作や状況の同時性と連続性が生じます。

4. 「現在分詞」の形容詞化

前節では、英語の「現在分詞」と日本語の「て形」は、その文法的機能が大変似ているという点を確認しました。本節ではこれらの相違点について考察します。特に前者が形容詞的機能を持ち、後者にそれがないという点に着目します。どうしてそうなのかを検証した後、この相違点が両者の本質的な違いを示すものであるのかを議論します。

英語の形容詞は、付加的用法と叙述的用法の二つに分かれます。前者は名詞句の中で名詞の直前に位置してそれを修飾し、後者では、be 動詞の補語となり述語を作ります。これは、名詞の統語的振る舞いに大変近いものです。形容詞は、また、その意味論的振る舞いも名詞に準じるころがあります。普通名詞の働き⁶の一つに固体をそうである物とそうでない物に区別する働きがあります。例えば「本」という名詞は、「本である物」と「そうでない物」を識別する働きをします。このような意味論機能は形容詞にも同様に見られるものです。例えば“red”という形容詞は、「赤い物」と「そうでない物」を区別する法則を内蔵していると言えます。嘗てギリシャの哲学者が「名詞と動詞の唯一の違いは、名詞には時制がなく動詞には時制があることだ。」と言ったそうですが、英語の形容詞には時制はありません。英語の形容詞は名詞的なのです。一方日本語の形容詞は大変動詞的です。形容詞には時制があり、統語的振る舞いも動詞と何ら遜色がないので、これを形容詞とは呼ばず状態動詞としても全く問題はないように思われます。「現在分詞」と同じ機能を持つ「て形」がなぜ形容詞化しないのかという問いには、「日本語には、そもそも形容詞化する形容詞がないから。」と言うこともできます。

形容詞的に使われる英語の「現在分詞」は、形容詞同様、名詞の前と後ろの二箇所でも名詞を修飾することができます。

- (12) a. A dog barking at the mailman
- b. 郵便配達人を吼えている犬
- c. A dog which is barking at a mailman

(12) a は、(12) c と同義で、(12) c から変形したものとも考えられます。(12) a が(12) c の省略形であるとする、ここで現在分詞が形容詞的に使われているとは言えなくなります。“Dog”を修飾しているのは関係節であって、“barking at the mailman”は、関係節の中で“be”動詞と共起して進行相を表すという動詞本来の機能を果たしていると言えます。関係節の統語的位置は違いますが、(12) abc は、意味も構造も、現在分詞の用法も全く同じです。

現在分詞が真に形容詞化するのは、(13) a のような場合です。

- (13) a. A barking dog
b. 吼える犬
c. A dog which barks
d. A dog which is barking

(13) a は、(13) d ではなく(13) c と同義です。(13) d の関係節が一時的な属性を表しているのに対し、(13) c のそれは、総称時制 (generic tense) を用い、永久的な或いは習慣的な属性を表しています。言い換えれば、特定の場所や時間に制約されない属性といえます。このような属性は、意味論的には、名詞や形容詞が意味するところに近づきます。例えば、“loyal” という形容詞が世界を「忠誠心のあるもの」と「そうでないもの」との集合に分けることができるように、“which barks” は、世界を「吼える習慣のあるもの」と「そうでないもの」の集合に分けることができます。“A loyal dog” とは、その「忠誠心のあるもの」の集合と犬の集合の交わりの中に存在する一つの任意の固体を意味し、“A dog which barks” は、「吼える習慣のあるもの」の集合と犬の集合の交わりの中に存在する任意の一固体を意味します。分詞が純粹に形容詞として名詞の前につく時は、このように、動詞が意味論的に十分に形容詞に近づいた時であろうと思われます。意味論的には十分形容詞である動詞が名詞の前に現れることが許される統語論的形態は、勿論時制を伴わない分詞以外にはありません。ですから、所謂分詞状形容詞と言われるものは、通例永久的／習慣的な属性を意味します。

動詞が意味論的に形容詞に接近する過程は、どの言語にも起こりうることであります。(13) b の「吼える犬」の関係節は、(12) b の「郵便配達人を吼えている犬」の関係節が一時的属性を表しているのに対し、永久的／習慣的な属性を意味します。(13) b の「吼える」は、意味論的には十分形容詞化しているといえますが、だからといって、形容詞の位置にも現れることが出来るような別の形態は、日本語では必要ありません。もともと、動詞も形容詞も統語論的には、同じ場所を共有しているのですから。英語では、名詞の右に関係節や不定詞を、左に名詞や形容詞と言った時制を伴わない⁷ 修飾語が許されますが、日本語では、全て左側に生じます。形容詞も動詞も関係節としてしか名詞を修飾することが出来ません。

英語の「現在分詞」が形容詞化する要因としては、「現在分詞」が時制を伴わない活用形であることもありますが、もっと大きな要因は、英語の形容詞の統語的性質です。日本語の「て形」が形容詞的機能を持たないのは、そもそも日本語に英語の形容詞に相応する統語的条件がないからで、「て形」の本来の文法的機能や性質とは独立した条件によります。ですから、「て形」に「現在分詞」の形容詞的機能がないからと言って、「て形」は、「現在分詞」とその本質的な文法的性質を共有していないとは言えません。

5. おわりに

当初の計画では、「現在分詞」の形容詞化と平行して、「て形」の副詞化についても論考したいと考えていましたが、時間切れで計画倒れとなりました。次回に回します。

数年前ソング先生にお年玉と称して頂戴して、そのまま読まずにいた何冊かの日本語の文法書を今回読む機会を得ました。先生は本を送って下さった翌翌年に亡くなられましたから、今となっては改めて御礼を申し上げることもできません。小樽の凍てついた夜空を見上げると、「まだ読んでなかったのか。」と言う声が聞こえてくるような気がしますが、寒いのが何よりお嫌い

だった先生がこの季節にこの辺を徘徊なさる筈ありません。

1 Sansom が挙げる残りの3つの用法は、

(3) Suffixed to verbs or adjectives it has formed many adverbial phrases which are now stereotyped, such as *kanete*, *subete*, *sate*, *tsuite*, *motte*.

(4) Combined with particles it forms the specialized words *tote* and *nite*.

(5) Combined with the auxiliary verb *ari* it forms *tari*.

ですが、何れも「て形」が辞書的或いは文法的語彙を派生させる過程に関わるものですので、本稿では論じません。

2 Jespersen が第二の分詞形と呼ぶ「過去分詞」については、受動態を表現する分詞形として、接続形としての機能を持ちアスペクトに寄与する「現在分詞」とここでは分けて考えます。「過去分詞」が完了相を表す点、「て形」もまた結果状態相 (resultative) で完了を意味することについては、ここでは論じません。

3 ここでは、Reinhart (1984) の定義にならない、「副詞などで特定される、出来事、状態、過程を含む時間」というほどの意味で使います。

4 勿論、このような解釈は、動詞の語彙的意味の制約をうけますが、ここでは、ある活用形が統語的意味的どのような機能しているかというメカニズムの基本的構造を把握することが目的ですので、日本語のテンス・アスペクト、動詞の語彙的意味、Aktionsart との関係などに関する膨大な文献に関しては、ここでは言及しません。

5 分詞構文には、譲歩を示す用法もありますが、「て形」にも、助詞の「も」が付いて譲歩を意味する用法があります。

a. 肩幅の狭いことは認めても、それがヒューの全体的外形を損ねているとは言えない。

b. Admitting that Hue is narrow-shouldered, I cannot say that it is harming his overall conformation.

c. Although I admit that Hue is narrow-shouldered, I cannot say that it is harming his overall conformation.

d. I admit that Hue is narrow-shouldered, but even so, I cannot say that it is harming his overall conformation.

“and” と “but” の間に論理的な違いはありませんから、ここでも “even” を意味する「も」と共起して「て形」が反意的接続をすると理解する事が出来ます。が、「て形」が助詞を伴って譲歩や条件を意味する動詞句を生成するのは、「てもいい」「てはいけない」「てはならない」など他にもありますので、これらについては、どうして(8)のような条件を表す分詞構文に「て形」が使われないのかという問題と一緒に次回の研究ノートで考察することにし、ここでは言及しません。

6 Gupta (1980) は、普通名詞には二つの意味論的法則が働いているとし、それらを “Principle of distinction”, “Principle of identity” と呼びます。形容詞が名詞と異なるのは、この二番目の法則がない点にあります。「この同じ “book”」とは言えますが、「この同じ “red”」とは言えません。

7 時制を伴わないというだけが条件ではないようです。同じ分詞でも、目的語などを伴う分詞句は名詞の直前には現れません。従って、b は非文法的となります。b の様な構造は、しかし動詞句内で動詞が最後にくる (Head-final) ドイツ語では許されます。

a. A dog which barks at the mailman

b. *A [barking at the mailman] dog

c. Ein den Brieftraeger anbellender Hund

b. 郵便配達人を吠える犬

英語でも分詞句内で動詞が名詞のすぐ前に位置する場合には、目的語や副詞が許されますが、その場合もやはり、分詞句全体が複合形容詞化していることは明らかです。

e. Hue is a well-behaved dog.

f. Hue is not a man-eating tiger.

参考文献

- Bloch, Bernard. 1946. "Studies in Colloquial Japanese, Part II, Syntax", *Language* 22. 200-48.
- Curme, G. O. 1931. *Syntax. A Grammar of the English Language*, Vol.3. Boston: Heath.
- Gupta, A. 1980. *The Logic of Common Nouns*. New Haven & London: Yale University Press.
- Hasegawa, Yoko, 1996. *A study of Japanese Clause Linkage: The Connective TE in Japanese*. Stanford: SCLI.
- 芳賀 綏 1962. 『日本文法教室』東京堂
- Jespersen, Otto. 1933. *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Jorden, Eleanor H., 1962-3. *Beginning Japanese*, Part I, II. New Haven: Yale University Press.
- Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Martin, Samuel. 1875. *A Reference Grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.
- Miller, Andrew. 1976. *The Japanese Language*, Chicago: The University of Chicago Press.
- 大塚高信・中島文雄監修 『新英語学辞典』研究社
- Reinhart, T. 1984. "Principles of gestalt perception in the temporal organization of narrative texts", *Linguistics* 22, 779-809.
- Sansom, George. 1928. *An Historical Grammar of Japanese*. Oxford: Clarendon Press
- 寺村秀夫 1969. 「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト, その一」国語学論説資料6, 53-61.
- Tsujimura, Natsuko, 1996. *An Introduction to Japanese Linguistics*. Cambridge, MA: Blackwell.
- _____, 1981. 『国語の文法(上)』国立国語研究所
- 山崎 貞(毛利可信増訂) 1951. 『新自修英文典』研究社